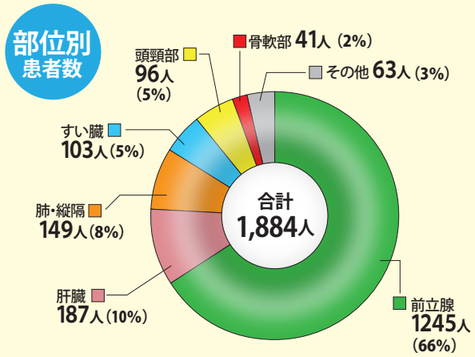
データで見るサガハイマット

（2017年2月末日現在）

部位別患者数

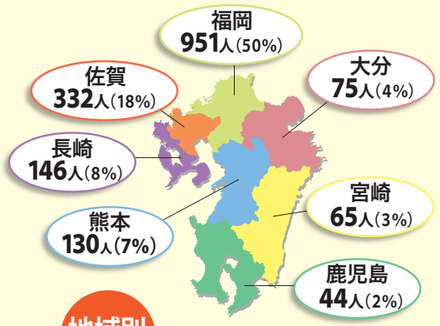


※その他は、直腸（骨盤内再発）、腎臓など

前立腺がんが67%

最初に治療を開始したこともあり、前立腺がんが1245人で全体の約66%を占めました。2番目に多いのが肝臓の187人で全体の約10%。次いで肺・縦隔149人、すい臓103人、頭頸部96人、骨軟部41人、その他（※）が63人となっています。

地域別患者数



その他の地域 141人 (8%)
（山口、東京、大阪、北海道など）

患者数九州7県で約92%

都道府県別に見ると、福岡県が951人で最も多く、全体の50%。次いで佐賀県332人（18%）、長崎県146人（8%）、熊本県130人（7%）、大分県75人（4%）、宮崎県65人（3%）、鹿児島県44人（2%）となっています。九州7県で92%を占めています。

スタッフ紹介

医師・医学博士　戸山 真吾さん

【略歴】
とやま・しんご／ 1979年山口県防府市出身。佐賀医科大学（現佐賀大学医学部）卒後、放射線医学総合研究所重粒子医科学センター（千葉県）などを経て2013年4月からサガハイマット勤務。趣味は音楽鑑賞、サガン鳥栖の応援観戦。佐賀市在住。

地域密着でさらなる信頼を得る

サガハイマットでは、おもに泌尿器科系、肝臓がんの治療を担当しています。重粒子線治療は今後ますます患者さんの負担を軽くし、治療実績を上げていくことのできる将来性ある治療法だと思います。開院当初から在籍し、約４年が経ちました。開院時と比べ、ますます地域の医療機関との連携が密になり、重粒子線治療そのものも認知されてきたことを実感しています。一番うれしいのは、治療を終えた患者さんが、経過観察の時に元気な姿を見せてくれた時です。患者さんの口コミでここを知り、新たに訪れる人も増えました。今後ますます治療実績を上げ、地域になくてはならない医療機関として貢献していけたらと思います。

●寄附をお願いします●

佐賀国際重粒子線がん治療財団では、引き続き皆さんからの寄附を募集しています。県内、ひいては九州のがん医療の充実につながるサガハイマットへのご支援をよろしくお願いします。

なお、当財団へご寄附をいただいた方には、特定公益増進法人に対する寄附として、税制上の優遇措置があります。詳しくは、当財団までお問い合わせください。

サガハイマット通信 vol.16
（平成29年3月号）

【お問い合わせ】
発　行　公益財団法人 佐賀国際重粒子線がん治療財団　（担当）本村
所在地　〒841-0071 佐賀県鳥栖市原古賀町3049番地
ＴＥＬ　0942(81)1897　　ＦＡＸ　0942(81)1905
Ｈ　Ｐ　http://www.saga-himat.jp/

サガハイマット通信

Vol.16
（平成29年3月号）

唐津市で医療フォーラムが開催されました

医療フォーラムの様子＝3月4日、唐津市民会館

CONTENTS

●唐津市で医療フォーラム
…近況報告「サガハイマットの今とこれから」塩山善之センター長
…医長報告「子宮がん治療の開始に向けて」松本圭司医長
…特別講演「医療と文学の融和」海堂 尊 氏
●データで見るサガハイマット
●【スタッフ紹介】医師・医学博士 戸山 真吾さん

SAGA HIMAT
SAGA Heavy Ion Medical Accelerator in Tosu
サガハイマットは、九州国際重粒子線がん治療センターの愛称です

サガハイマットの受診に関する相談窓口

電　話　0942-50-8812
（受付時間：平日の9時～12時、13時～17時）
メール　saga-himat@saga-himat.jp

唐津市で医療フォーラム
重粒子線の知識深める

重粒子線がん治療について広く一般に理解してもらおうと医療フォーラムが3月4日、唐津市で開かれました。サガハイマットの塩山善之センター長が近況報告したほか、松本圭司医長が春から治療開始予定の子宮がんについて紹介。「チームバチスタの栄光」の著者で医師の海堂尊氏の特別講演もあり、訪れた人はあらためて重粒子線がん治療について理解を深めました。

近況報告

塩山善之センター長 「サガハイマットの今とこれから」

第3治療室の準備進む

重粒子線治療の特長は、従来の放射線に比べがん細胞の殺傷力が高い点と、がんの病巣へ線量を集中的に照射できる点です。治療対象は一つの部位に留まっている固形のがんで、骨肉腫など従来の放射線が効きにくいがんにも有効です。具体的には、前立腺をはじめ肝臓、肺、すい臓など多岐にわたります。サガハイマットの治療患者数は2月末現在で1800人を超えました。佐賀や福岡など九州を中心に全国から患者さんが訪れています。

サガハイマットは現在、2つの治療室で治療を行っていますが、今春からスキャニング照射という高度な技術を搭載した3番目の治療室が新たに稼働予定です。現在の治療室では、患者さんのがんの形に合わせた補助器具を製作して重粒子線を照射していますが、新しい治療室では、奥行きや方向を変えながら、がんを塗りつぶしていくように照射できるようになります。複雑な形の腫瘍や、より大きな腫瘍にも対応しやすくなるほか、補助器具の製作期間を短縮することができるなど患者さんの利便性も高まります。また、新治療室の稼働にあわせて、新たな治療対象として、子宮がんと食道がんを加える予定です。

重粒子線治療は昨年4月、骨軟部腫瘍の治療が公的医療保険の適用となりました。今後は、他の医療施設とも連携して骨軟部腫瘍以外の部位でも保険適用されるよう、さらに臨床研究を重ねていきたいと思います。

医長報告

松本圭司医長 「子宮がん治療の開始に向けて」

局部集中性を活かして子宮がん治療へ

子宮頸がんのステージは、子宮頸部に限局したⅠ期から他の臓器に転移が認められるⅣ期までの4段階があります。一般的な治療法は、Ⅰ～Ⅱ期は手術と放射線治療、がんが進行し手術が難しくなるⅢ期以上は放射線治療が主体となります。そのうち、従来のエックス線の治療では、外部からの照射と器具を挿入しての腔内照射を併用して行います。抗がん剤と組み合わせた治療で高い治療効果が認められています。

Ⅲ期以上は放射線治療が主体となりますが、特に重粒子線治療は、腫瘍が大きい場合やエックス線が効きにくい腺がんというタイプのがんに向いています。サガハイマットでは、今春から子宮頸がん、子宮体がん、婦人科領域の悪性黒色腫の3種類を対象とした治療を開始予定です。

放射線医学総合研究所病院(千葉県)の臨床例で、子宮頸がんの大きさが6・5㌢、リンパ節にも5㌢の転移が認められたケースがあります。手術もエックス線も難しいとされていましたが、重粒子線治療後はがんが小さくなり、7年後も再発はありません。子宮頸部の周りは臓器が集まっているため、放射線の照射が難しいとされていましたが、がん病巣にピンポイントで照射する重粒子線は、周りの臓器をほとんど傷つけることがありません。また、体の外側からの照射で済むので患者さんの負担も少ない治療法だといえます。

【特別講演】

「医療と文学の融和」

海堂 尊 氏

唐津の地で文学のめざめ

15年前、家族旅行で訪れた唐津城で、唐津の心地よい風に誘われるように、そこで行われていた俳句コンクールに応募したところ、数カ月後に入選のお知らせをいただきました。思えば文学的なことで評価されたのはこれが初めて。まさに作家・海堂尊のきっかけとなった思い出の地が唐津なのです。

各分野の専門医の連携で確立されてきた重粒子線治療

私は1997年4月から、千葉県の放射線医学総合研究所重粒子医科学センター病院(放医研)の病理医として勤務していました。同じころ、放医研では試験的に重粒子線を使ったがんの一般治療が始まっていました。

重粒子線治療は、科学的に組み立てられた素晴らしい治療法です。放医研では、今のサガハイマットと同じように、発足当初から臓器別の班会議を設け、検討会が開かれていました。各分野の専門家が部位別に十数人集まり、どういう症例を治療するか、治療の内容や経過、結果の検証などをオープンにディスカッションする仕組みです。当たり前のようなことですが、日本の医学会では病院を超えて広く積極的に治療、評価すること自体がとても珍しいことです。そのかいあって重粒子線は治療法が確立され、信頼度も増し、高度先進医療として認められました。説得力あるデータを提示できたことも大きいと思います。

小説を通して医療現場の課題を社会に発信

私は作家としてたくさんの小説を生み出してきました。なぜ小説という手段なのか、ということについてお話しします。医療現場で起きていることを現場の人がメディアに発信しようとしてもあまり取り上げられません。しかし物語にすることで、具体的な治療内容や医師の気持ちなど読者は追体験でき、より強く実感できるのです。私の小説では医療行為に関する記述は、ほぼ忠実に表現しています。専門的な論文を読むより一般に届きやすいと思っています。誰でもいつどんな病気にかかるか分かりません。症状や治療方法を知っているのと知らないのとでは覚悟が違います。小説を読むことはいつか来るかもしれない〝その日〟に備えるワクチンのようなものかもしれません。そういう意味でも医師が小説を書いて社会に発信する意義はあると思っています。